

高砂の偉人・工楽松右衛門と明石の帆布

○高砂の偉人・工楽松右衛門

江戸時代の後期に活躍した高砂の工楽松右衛門(くらく まつえもん 初代 1743-1812)は、高砂東宮町に生まれ、若くして兵庫津(神戸市兵庫区)に出て、船乗りとなります。のちに御影屋を名乗り海運業を営みましたが、船の帆布(はんぷ)を改良し丈夫で耐久性のある「松右衛門帆(ほ)」を発明します。また、幕府や藩の依頼で、箱館(北海道函館市)や択捉(エトロフ)島、鞆(とも)の津(広島県福山市)など、全国の港を改修しました。文化7年(1810)に高砂へ居を構えました。松右衛門は元の姓は「宮本」でしたが、蝦夷地の土木事業の功績で、幕府より「工夫を楽しむ」ということで「工楽」という苗字を賜りました。



高砂神社の境内に初代工楽松右衛門の銅像が立っています。この銅像は、大正5年(1916)地元の人々によって建立され、戦争中に金属供出でいったん無くなりましたが、昭和41年(1966)に市内の有志と全国の帆布製造業者によって再建されたものです。その銅像の台座には功績を讃えた「工楽松右衛門翁銅像碑銘」が刻まれています。

○松右衛門帆の生産地 明石、二見

江戸時代、西回り航路や東回り航路、また、大坂と江戸を結ぶ南海路などで荷物を運搬した船は、一本マストの帆掛け船でした。弁財(才)船とも呼ばれ、千石積の大型船もありました。風をとらえ巧みに帆を操り航行しました。この帆は、木綿で作られており、松右衛門は改良を重ね丈夫な帆を発明しました。帆の強度が増したことで速度が増すなど、この帆が輸送能力をアップし、海運の発達をもたらしました。明治44年(1911)出版の『西撰大観』に、松右衛門の帆の発明の様子が記載されています。



「頃は天明年中で尚当時の帆といったら筵を一般に用ひて居る時代であるから、松右衛門はこの帆を改良せねばならぬといふ所より同年の暮れに普通の木綿を幾重にも重ねて、筵帆の代りに使用してみる、..それから段々と工夫を凝らして、木綿地より手厚いものを拵へねばならぬとの考へを起し細い糸を合わせて太く、幅広のものを織出して使用した、..改良に改良を加へ二見村に織物工場をやうなものを設けた、この二見村は明石郡に続いて居る所から早くも明石の商人が之に目を付けて松右衛門の教授を受け明石で率先したのは今の明石町西新町前田藤兵衛氏の祖先である、同家は目下帆布の仲買業を営んで居る、それから以来船頭は松右衛門の発明した帆布でなければならぬ様に言ひ嘸し、日本全国到る処その名を知られる様になった」



松右衛門帆は、松右衛門の創意工夫の賜物ですが、播州地方が、木綿の産地であったことも背景にあります。周辺に木綿栽培する農家、糸を紡ぐ業者も多く木綿織物業も盛んでした。

○『農具便利論』と初代工楽松右衛門

江戸時代後期の農学者、大蔵永常(明和5年・1768～?)は、農業経営方式について述べた『広益国産考』や諸国の綿の作り方を記した『綿圃要務』、農具を分類・説明した『農具便利論』など著しています。文政5年(1822)に刊行された『農具便利論』に、農具ではないが、初代工楽松右衛門が造ったいろいろな船やエピソードが紹介されています。

「40歳の頃独立して仕事をはじめた。この翁が常にっていたことは、『人として世の中に役立つという努力もしないで、べんべんと日を送るなどというのは鳥や獣にも劣ることである。およそ、利益をきわめようとするなら、どうして発明ということをせずにはおれようか』ということであった。そして、金銭を投じて工夫を重ねたことは少なくなかった。そうしたなか、船の帆を織るということをはじめたが、それが現在、松右衛門帆と呼ばれているもので、各地の船に利用されている。...大きな港を築いたが、そのとき右の図に出てきた『石釣船』や『底なし船』などを考案して造り、使ったのである。」



○高砂堀川湊及び工楽松右衛門旧宅(県指定 史跡 平成31年3月)

工楽松右衛門のゆかりの地である高砂は加古川河口に位置し、加古川舟運と瀬戸内海運の中継地として繁栄しました。水運によって運ばれた荷物の集散地としてにぎわい、経済的には播磨第一の湊となり、その経済力は多くの文化人を高砂に引き寄せました。工楽家は、近代には砂糖の間屋などを営みながら、棟方志功などの文化人と交流。居宅は文化サロンの場にもなっていました。



※加古川舟運:大正2年に開通した播州鉄道(現 JR 加古川線の前身)に積荷を奪われるまで、江戸初期から加古川上流からの米や物資を高瀬舟(底を平たくした小船)で輸送。高砂から様々な物資が上流へも輸送される。加古川が交通の大動脈となっていた。

【参考文献】『風を編む 海をつなぐ 工楽松右衛門物語』(2013 高砂市教育委員会)など